
家族のあり方

桜ローズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家族のあり方

【Nコード】

N2128BA

【作者名】

桜ロース

【あらすじ】

離婚して子供を連れて実家に戻ってきた沙織と子供沙織はある決意を胸に家を出る
さまざまな経験と試練、ようやく起動に乗った一人の生活
しかし半年足らずで実家の兄の死
それを機に両親は一気に老け込んでしまう
沙織のベストな選択は何なのか

プロローグ（前書き）

この作品は家族のあり方、ゆがんだ考えなどをといたフィクションです

ブローグ

朝の7時、分娩台の上で昨日の夜から陣痛と戦っている

今は落ち着いているが、次の分娩に備えて意気を整えている

産婦人科は朝食の時間

サンドイッチと紅茶が運ばれてきたが、食べられるはずもない

母が分娩室に入ってきた

「少し食べないと、生まれるとき力で無いよ」

「そんな子といっても食べられないよ、もうそろそろ陣痛来るから出てって」

力なく答えると、母は出て行った

まもなく3315グラムの大きな女の子が生まれた

子供の顔をみて、言葉無く涙が止まらない

家を出る

沙織は朝早く起きた、荷物を車に積む為である。

両親が起きる前に車に入れておかなければ、大きなボストンバックが二つとノートパソコン

玄関にある靴を4足入れた。

これで準備は出来た

家に入りもう一度布団にもぐりこむ

2時間ほどウトウトしていると母の声がした

「さおりー起きないと時間だよ」

何も知らない母友美恵は時間通りに声をかけてくれた

部屋を出てリビングに降りていく

リビングのベビーベットで生後6ヶ月の美穂が寝ている

離婚して家に帰って以来、美穂はずっとこうしてここにいる

沙織は同じ部屋で寝たことがない

美穂のことは友美恵が一手に引き受けている

仕事をしなくちゃ、働かなくちゃ、お金いるんだから稼いでもらわないと

そう言つて友美恵は佐織から美穂を離れた

沙織は仕事から帰って美穂の顔を見るか、休みの日に遊んでやるくらいだ

オムツさえ替えてない。

佐織はいつも、自分は何のためにいるのか？美穂の母親ではないのか？

と、自分に問いかけていた

朝ごはんを食べて、いつものように美穂に「ママお仕事行ってくる

からね」と声をかけ

友美恵にも「いつてきまーす」と言つて玄関を出た車に乗り込み、家の前を右に曲がった、職場に行くのは左だガソリンスタンドに寄りガソリンを満タンにして準備はできた美穂の実家は東京に程近い千葉県のはずれだ

これから向かうのは関西の滋賀県

この日のために沙織は2週間前から準備をしていた実家のそばにある派遣会社に面接に行き、できるだけ遠くの仕事を探してもらった

派遣会社からはすぐに返事があり、滋賀県の工場で受け入れてくれることになった
もちろん寮に入るのである

派遣会社との約束は7月16日午後3時

今日は7月14日の朝である。少し早いがこの日を逃すと約束の日に滋賀に入れない

とりあえず、予約を入れてあるビジネスホテルに向かう

今日はそこで泊まる

チェックインを済ませ荷物も降ろさずにまた車で出かけた

多分最後であろう地元の風景を目に胸に焼き付けるために出かけた思い出ある場所をいくつか回ってホテルに戻ったのは夕方4時ぐら이었다。

いつもだと、仕事がそろそろ終わる時間

部屋に入ると佐織は携帯電話を取り出し、友美恵の携帯、父義夫の携帯、実家の電話を

着信拒否リストにいれた。

次の日朝早くにホテルを出て高速道路に入った

すぐに都内に入り、都内を抜け東名高速に入った

そこで、着信を確認する

夜から朝にかけて30を越す友美恵と義夫からの着信が入っていた

佐織はサービスエリアで休憩を取った

なんだかんだで、3時間ほど運転している。

30分ほど休憩してまた車を走らせる

それを何度繰り返しただろう

ようやく滋賀県に着いたのは夜6時を過ぎていた

約束は明日だ、ここでもビジネスホテルに泊まった

いよいよ明日派遣会社の人と会う。

初めてのことばかり

沙織は滋賀県の守口という駅にいた

しばらくすると、30代半ばぐらいのスーツ姿の男性が声をかけた

「三上沙織さんですね、私、東西スタッフの水野です」

「はい、三上沙織ですよろしくお願いします」

「じゃあ早速事務所の行きましよう、私の車の後を突いてきてください」

そう言われ、お互い車に乗り込んだ。

10分ほどで事務所についた、駅から少し離れた雑居ビルに派遣会社の事務所はあった

車を降りると、どうやら水野の車にもう一人女性が乗っていた

会議室に通され、水野は書類を取りに行っている間に

沙織はもう一人の女性に話しかけた

「私、三上沙織です、ヨロシクね」

すると相手は、小さな声で

「相原真紀です」

と言って頭を下げた

見たところまだ10代か20代前半に見えた。

「私27歳です、相原さんはおいくつですか？」

と聞くと、

「19歳です」

と答えてくれた。まだ若く人見知りをしているようだった

しばらくして、水野が戻ってきた

「えっと、ここまでの交通費を生産しますね」

沙織は拘束のチケットを渡し車のメーター数を告げた

高速代とガソリン代が出るのだ

相原は隣りの駅から来たとのことで、電車代を受け取っていた

次に水野が出した書類は、緊急連絡先だった

ちよつと戸惑った沙織だが、実家の住所と父の名前を三上義夫と書いた

全部の書類が書き終わって水野が

「実は寮になる部屋はこれから探して契約するので、しばらくはホテルから仕事に行ってください

ホテルから工場は少し離れているので、私が送り迎えしますので」
そう言くと、事務所からホテルまで二人を連れて行ってくれた

「明日の朝8時に迎えに来ますから、ロビーで待っていてください」
それだけ告げて水野は帰っていった

相原と沙織の部屋は隣同士だった

沙織は相原に食事に行こうと誘い、沙織の車で近くのアミレスに行った

食事をしてる最中いろいろ話をした

どうやら、相原は母の再婚相手とうまく行かなくなり家を出ることになったらしい

しばらく隣り街の祖父の家に身を置き仕事を探していたそうだ

二人は初日の仕事に備えて早めにホテルに帰り眠りについた

朝8時ちよつと前にロビーに出た沙織

相原はまだ着てない、タバコに火をつけ一本吸い終わっても相原は来ない

仕方ないので、部屋に迎えに行った

すると、ぼさぼさ頭の相原があわてて出てきた

「寝坊しちゃったみたい、もう向かえきてる？」

「まだ着てないよ、急いで降りよう」

二人は、急いでロビーに降りていった

ちよつと二人がロビーに出たときに水野の車が入ってくるのが見えた

工場までは来るまで15分くらいだった
敷地の中にいくつかの大きな建物があった

その一番奥の建物に案内された、中に入ると広いワンフロアになっていて端にいくつかのブースがあった、水野はそのかなのブースに二人を連れて行き

「もうすぐ始まるから、ここで座っていて、今日は工場の案内と安全教育だけだから緊張しないで

それから、仕事終わる時間に僕はここで待ってるから」
そういつて帰って行った

二人のほかに何人が座っていた

その中の一人の男の子の話だと、派遣会社は3社はいつているという
同じ派遣会社からは、3人が定員だと聞いた

どうやら、沙織たちの派遣会社のもう一人はドタキャンしたらしかった

しばらくすると、定年間際のような男性が現れた

「さて、はじめようかね」

とその男は言いながらノートをみんなに配った

「私は皆さんの相談役の斉藤です、ここで働いていて困ったことや相談ごとがあれば何でも私に言ってください、皆さんが働きやすいようにするのが私の仕事です」

そう言いながら、ビデオをつけた

安全教育のビデオだった。

「ここに出てくる注意事項をノートに取ってください、あと気になる事や質問があれば書いておいてください。質問は後で受け付けます」

1時間ほどビデオを見た

沙織と相原は派遣が初めてなので、必死でノートを取った

その後、別の棟の事務所らしきところで、IDカードに張る写真を撮った

IDカードは食堂でも使いうらしい、お金をチャージしてそれで支払

いをするのだ

社員食堂で、お金のチャージする機会の説明があり

そのままお昼休憩になった。

やっと一息ついた感じで緊張のせいか疲れてしまった

お昼からは工場の組織の説明や、自分たちの実際に仕事する現場を見学した

いろいろな作業をしているラインがある

「みんながどこのラインに入るかは、明日の朝発表します」

と斉藤が言った

沙織は特に質問もなく、一人になってしまったのだから、どんな仕事でもしなくちゃいけないと思っていた。

ようやく、初体験の長い一日が終わった

寮に入れる

沙織と相原は違うところに配属になった

沙織の仕事はパソコン等に使われる基盤の政策だった

部品を乗せたり、はんだと塗ったりする機会と感想させる機械、4個の機会がつながっている

長い機械が6列おいてあった、沙織はその機会のオペレーターという事だった

配属された部署はほとんどが男性、唯一の女性も今月いっぱい退職するとの事だった

その、退職する女性、岸田佳代子に仕事を教えてもらうことになった
長い機械の後ろと前に操作版があり、それぞれ前だけ後ろだけでしか出来ない事があり

オペレーターは機会をぐるぐると走り回ることになる

基盤によって枚数が違い多く作るときは暇になる

機会のセッティングが終われば、トラブルが無い限りやることは無い
たが、長年使っているらしい機会で、しょっちゅう止まることがあるらしい

初日という事で、沙織は岸田の後ろをついてどんな風に仕事するのか見てるだけだった

とにかく後ろをついて回るのがやっとで、何をどうしてるのか良くわからなかった

午後からは、実際に機会に触らせてもらった

それぞれの機会にマニュアルがぶら下げてある、エラー番号と対処の仕方が書いてある

それを見れば大方わかると岸田は言っていた

仕事が終わリホテルに戻ると、足がパンパンになっていた

もう引き返すわけには行かない、仕事を自分の物にしくは
そう自分に言い聞かせていた

次の日は土曜日で休みだった、携帯に水野から電話だ

「寮を借りたから、今日にでも引越したいんだけど、大丈夫ですか？」

「私は大丈夫ですよ、でも相原さんまだ寝てるんじゃないですか？」
「そうなんだよ、電話でなくてね、ちよつと部屋ノックしてみてるかな」

「わかりました、起きたら水野さんに電話します」
「じゃ頼むよ」

水野は忙しそうに電話を切った

相原の部屋をノックしてみたが応答が無い

自分の部屋に戻って電話をしたが出ない、困ったなあ引越し早いほう
がいいのになあ

部屋でお菓子を食べながら待つてみることにした

1時間ぐらい立った頃、相原が部屋へやってきた
ドアを開けると眠そうに目をこすっている

「電話くれたよね、水野さんからも何回も電話入ってて何かあったの？」

「寮に入れるんだって、今日引越したいって水野さんがいつた
私は何時でもかまわないって返事したけど、ちよつと水野さんに
電話入れてみ」

「うん、わかった」

そついつて、私の部屋から電話を掛けた

引越しは午後からとなった

私は先に水野さんの車で寮に行き、場所を確認して後から車で荷物を運んだ

荷物といってもボストンバック2個とパソコンだけである

自分の車に相原の荷物を積んで行った

寮は4階建てのマンション、女性だからという事でセキュリティのしっかりしたオートロックだ

相原は3階、私は4階の部屋になった

玄関を入ると右手にキッチン、左手にバス、トイレ奥のドアを開けると、8畳ほどのフローリングの部屋になっていた。

さすがに4階、ベランダからの眺めは良かった

派遣会社の事務員さんが掃除してくれたらしかった

布団にテレビ、冷蔵庫の生活必需品は会社の物だ

これだけの広さに、光熱費込みで5万の家賃がお給料から引かれる光熱費込みなので、高くはないむしろ近所の相場からいうと安いほうだろう

次の日近所の大型家電店に炊飯器とトースターを買いに出かけたいくらなんでも外食ばかりじゃ、お給料が持たない

ついでに安かったのでフローリングに敷くラグを買って帰った

なんとか部屋らしくなってきた

何とか新しい生活を始められた、今までのように親に頼ることが出来ない

ここまできたら、なんとしても頑張らなくてはいけないと新たに思う沙織だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2128ba/>

家族のあり方

2012年1月5日18時50分発行